第1回京都市歴史的景観の保全に関する検討会議事録

- 1 日 時 平成26年8月22日（金） 午前10時から午後0時5分まで
- 2 場 所 職員会館かもがわ 中会議室
- 3 出席者 委 員：板谷直子委員，大庭哲治委員，小浦久子委員，清水重敦委員，
深町加津枝委員，松山大耕委員，門内輝行委員

事務局：西澤建築技術担当局長兼景観創生監，松田都市景観部長，
山本景観政策課長，小嶋景観政策課担当課長，奥村風致保全課長，
門川企画係長
- 4 次 第
開 会
議 題
（1）調査対象について
（2）調査方法について
（3）その他
閉 会
- 5 公開情報 傍 聴 者 3人
報道関係 2人

(1) 開会

- ア あいさつ 西澤建築技術担当局長兼景観創生監
- イ 委員会の公開について報告
- ウ 座長，副座長の指名について報告
(座長 門内輝行委員，副座長 宗田好史委員)

(2) 調査対象について

- ア 配布資料「1. 調査と目的」「2. 調査対象」「3. 調査スケジュール及び調査フロー」の内容を説明(京都市)
- イ 案件について下記のとおり質疑応答

○座長：最初に調査についてということで，全般的な背景，目的，調査対象，スケジュール，調査フローについて説明いただきました。今日は，取り立てたミッションなしにフリーハンドで議論していいということですが，本格的な調査が始まる前の今の段階でご意見を言っていただくと，今後の調査にいろいろと反映できるはずですので，ご自由にご発言いただきたいと思います。今日の議題としましては，最初に議案書にありますように，調査全般についてご説明をいただいたところですが，予定の時間としましては11時過ぎぐらいまでを，調査全般についての議論とさせていただきます。後の議題で残りの資料をもとにもう少し詳細な報告があると思いますので，調査方法については次の議題とさせていただきます。何かご意見，ご質問は，ございますでしょうか。

○委員：今，景観政策でカバーしていることが調査対象に含まれていると思います。その中に，駐車場を設ける際に，街並み景観の連続性に配慮して，生垣等を設けること，塀，生垣等を設けることという基準がガイドラインにあります。確かに，せっかく建物として街並みが残っていても，その前に車が止まっていると，景観上の障害になる。世界遺産の管理計画を作るときに，世界遺産の周辺では必ず交通計画と自動車の処理のことが厳しくいわれます。だから，ある建物が世界遺産に指定されたらバッファゾーンを設定して，バッファゾーンの外側に駐車場を設けるとか，バッファゾーンの中に駐車場を置く場合は生垣等で隠すとかが当然なされます。京都市も古都京都の文化財の保存管理計画を作る必要がありますが，保存管理計画書をユネスコに出すときは，当然この交通計画と駐車場計画を書き込むこととなります。京都市でも今，景観政策以降の家では車を隠す形で整備いただいています。

世界遺産の周辺，あるいは場合によっては社寺の中，世界遺産本体の中に駐車場を

設けているお寺も散見されます。これはお寺さんの判断ですが、当然、望ましいことではありません。急には無理かもしれませんが、世界遺産に登録されているということで当然ご協力いただくべきことです。世界遺産登録時には、世界遺産に対するご理解もありませんでしたが、20年が経ち、世界遺産の理解も進んできました。当然、世界遺産をめぐる基準、規制も厳しくなってきました。そのため、すぐにとは言いませんが、世界遺産本体、それから周辺の住宅地での車をどう扱うか、駐車スペースをどう扱うかということに関しては、ぜひ議論を始める必要があります。だから、どこに駐車スペースがあるかということは調べていただきたいと思います。

○京都市：駐車場、交通計画の観点は抜けていましたので、調査ではそういった観点を項目として挙げていきます。

○座長：車に限らず、空調室外機など、いろいろな近代的なテクノロジーが伝統的なものの中に入ってきているという問題だと思います。とりわけその代表選手が車ということですが、その点についてはたぶん後の調査方法にも関わってくるはずですが、特に車の場合は動きますから規制が難しいところですが、大変大事な視点ですので、ぜひ組み込んでいただければと思います。

○委員：今回の調査では、建物が中心になっていると思いますが、例えば吉田山や双ヶ丘など、市街地の中に非常に大事な緑のまとまりがあり、その緑のまとまりと建物との一体感というところからも点検していただきたいです。また、緑については規模で捉えているところが中心だと思いますが、シンボルとなった巨木や歴史的に大事な樹木などもあります。そういう質的な部分からみて大事な緑と合わせて調査いただく方が、京都の一体となる歴史的景観ということでは大事だと思いますので、その点を考慮いただければと思います。

○京都市：お寺、神社の中でシンボリックな樹木があれば、それも調査をしようと考えていました。吉田山は調査を検討したいと思います。双ヶ丘は妙心寺と一緒に調べてみようと思います。

○座長：京都の場合、周辺に山並みというマクロな大自然があり、市街地の中には神社の緑とか坪庭とかがあり、さらに床の間の盆栽に至るまで、マクロからミクロに至るさまざまなレベルに、緑が連続的に現れるという特徴があります。しかし、それがだんだん不連続になっています。だから、各エリアに分けて調査をしてカルテを作るだけではなく、エリア間の関係をチェックしていく必要があると思います。生態系としての緑は連続していかなければいけないという問題があるので、各エリアを押しえると同

時に、エリア相互の関係をチェックできるようなシステムをお考えいただければと思います。

○京都市：緑の関係では、保存樹などすでに樹木単体としての調査もありますので、それを今回の調査でも重ねてみたいと思っております。

○委員：ネットワークみたいな観点も一緒にみていただくといいと思います。

○京都市：はい、了解しました。

○委員：1つは、京都の文化に非常に貢献しているところであれば、旅館や料亭など一般企業であっても非常に大事だと思いますので、調査された方がいいのではないかと思います。それから、景観というのはやはり五感で感じるというか、風景だと思うので、例えば音とか香りとか、そういったものも総合的に考えていけないのではないかと。例えば、お寺さんに来ている、横に焼肉屋があって香りが漂ってくると、これはどうなのか疑問だと思うこともあるでしょう。また、季節が変わったらどうなるのかということも考えなければいけないのではないかと。それから、緑があればいいのかということも思います。ドイツのインゲシュブルというロマンス街道の町では花の種類が全て決まっていて、とても一体感が町にあります。今の季節だと朝顔はいいなと思いますがその横にパンジーが咲いていたりとか、ヒマワリがあるとしたら、「これは何なのだ。」と思うこともあると思います。これは調査そのものというよりもその先の話ですが、その地域全体で環境を醸成していくところまでいけたらよりいいのではないかなと思いました。

○座長：大変大事な視点をご指摘いただいたと思います。確かに寺社だけではなくて、民間の企業の持っている庭園なども大切です。その辺も調査対象に加えていただくようお願いいたします。それから五感の話はやはり大変大事で、サウンドスケープ、香りの景観などは、最近注目を集めている問題だと思います。季節と同時に時間の問題も重要で、朝とか夜とか、夜間景観の問題もありますし、天気の変化したときの景観についても検討が必要です。雨が降ると表情が変わったりするので、雨の景観だけ研究している人もいます。さらに、時間による一瞬の変化の問題もあります。この中には、お祭りの時に町を飾っていくという、機能を越えた美の問題もあると思います。

○委員：どうしても大きな変化に目がいきがちだと思いますが、小さな変化が積み重なることによって、周辺のイメージや町の雰囲気がとても変わってっていくと思います。そういった資産の周辺の町がどういう町なのかということも共有できるようなデー

タがあるといいかなと思います。景観地区のところは比較的細かく区域を分けて、町のあり方を書いています、それ以外の建造物修景地区の方はそれほどきちんと書いていないので、いい機会だと思います。

○座 長：今ご指摘いただいた、小さな変化というのは、個人でもできることに関わっています。例えば軒先に1輪の花を置くだけでも、みんながやるとそれが集積して地域全体として効果が出てくることもあると思います。これは調査方法に関わる問題でもあります、小さな変化でも、集まると大変大きな効果を生むわけですから。小さな出来事にも調査対象を広げていただけると良いと思います。

○委 員：そうです。戸建ての建物が変化していくことによって、町は大きく変わっていきます。そういうのが悪いとはいえないですが、戸建を建てる方に、この町を大事にしてくださいということ伝えていく必要があると思います。それを伝えるための材料が見たいです。

○座 長：特に今回取り上げている図になるもの、文化的にレベルの高いものはもちろん大切ですが、その周辺に問題を広げていく場合は、そのような小さな変化も配慮する視点が必要になるのではないかと思います。文化財を手掛かりにしながら、周辺の景観・環境を整備していくという視点は、「歴史まちづくり法」ともからんで、大事な視点かなと思います。特に周辺の修景地区などの、これまであまりやっていなかったエリアの問題もご指摘いただきましたので、よろしく願いいたします。

○委 員：地域ごとの歴史、物語をまとまりとして捉える必要があるだろうと非常に感じました。今回の調査は寺社を中心にされていますが、もともと持っているまとまりが分断されてしまうようなことは避ける必要があると思います。また、文化的景観もかなり今回の歴史的景観の話と近い問題があるので、そういうものは、最初から組込めないのだろうかと感じます。

もう一つ、景観重要建造物の調査で、近代建築の木造が対象から外されているのはなぜですか。また、最近和風の近代建築の価値も評価されるようになってきていますので、和風のものをどう扱うかについてお考えをお聞かせいただきたい。

○京都市：京都市は建物単体を景観の観点から指定する制度がありますが、必ずしも伝統的な町家にこだわっていたわけではなくて、木造の近代建築、近代和風のものも指定してきていました。今回は、今まで指定してこなかった寺社や木造でない近代建築も指定の対象とする方針を決めた中で、指定候補のリストや、指定の考え方などを検討して整理をしていく必要があります、近代建築については、優先的に、今まで全く指定をしな

かったレンガ造や鉄筋コンクリート造のものをまず調べていきます。

○座 長：今回の検討は、来年の3月までという、審議まで含めるともっと短期間で行うことになっています。4ヶ月ぐらいですべてのことをやるのはとても難しいことなので、実際には木造を選んでいても、いろいろあるうちのここをやっているという書き方をした方が良いと思います。今回の試みは、京都の文化財データベースを総合的に作成していく上でのスタートなのではないかと思います。そういう意味では全部できなくてもいいけど、今回はその中のこれを行いましたというレポートを出すよりも、その試みの中で見つかった課題を明確にすることが大切です。木造はやらないというのではなくて、今回はできる範囲から始めていくということだとすると、そのあたりのロードマップを描いていただく必要があると思います。4ヶ月で京都の1,200年に及ぶ歴史の中で育まれてきた文化財を全部やることは不可能ですから。ではここで、第1の議題についてご発言いただいていない方にご発言いただきたいと思います。大庭委員、いかがでしょうか。

○委 員：まず1点目ですが、調査候補地として、伝建地区や歴史的風土保存地区なども可能性としてあるのかどうか。

2点目は、寺社仏閣が作る駐車場以外にも、周辺でコインパーキングなんかも非常によく見られます。景観に影響を及ぼすという観点からも、潜在的に開発する可能性があるという意味でも、コインパーキング、あるいは空地は、非常に重要な要素になってくると思いますので、しっかりと検討していく必要があると思いました。

○座 長：今、それを伺っていて思ったことは、長期的になりますけど、京都全体のモビリティのデザインをちゃんとしていただく必要があるということです。歩ける町と言っているけどなかなか歩けませんし、自転車や電気自動車、あるいはLRTとか、公共交通との関係もあります。自動車を前提にして一生懸命対応を考えているのですが、今回の調査範囲を超えている問題ですけど、長期的には都市全体のモビリティ問題として取り組む必要があると思います。

ある国際学会に出たときに、自動車のデザインに関心を持っている人がいて、ニューヨークという各都市に似合う車のデザインの研究を進めていて、超高層ビルが美しく映る自動車のデザインをする話をしていました。そこまで考えると、車だから悪いということではなくて、京都に似合う新しい交通手段を考えるということもあると思います。

○委 員：先ほど、小浦委員からの資産の周辺の町はどのようなところであったのかということの重要性のご指摘がありました。それを考える上で、例えば古地図などを参照す

ることは非常に重要なことだと思います。例えば世界遺産の周辺地区を見てみると、木造住宅の良質なものが残っているが、そういうものが指定されていない事例などをみることができます。

あと、周辺地区とコアとなる寺社が、もともとどういう関わりがあったのかということを見る上で、参道などは非常に重要であると思います。過去、参道として重要であったものが、車で来られて境内地の中に駐車場を置かれている場合などは、その参道が参道足り得なくなると、さびれていく事例もあります。また今後、新たな寺社と寺社をつなげる参道を新しく考えることによって、その周辺の資産が、松山委員がおっしゃったように、一体的な景観整備をする上で、ツールとなっていく可能性もあるかだと思います。加えて、動きながらどう見えるか。止まったところの景観だけではなくて、動きながらどう見えるか、どう作っていくべきかという視点もまた一つ、重要なところではないかだと思います。

○座 長：つまりその場所に来た人が、どのように景観を経験するかという、ある種の **Experience**（経験）をデザインしてあげるということが大事なので、どういう視点場で、どんなルートで、どういう経験が得られるかということが調査できるといいと思いました。

宗田委員は、最初でしたので自動車の問題だけを指摘されたのですが、皆さんのご意見を聞いていろいろしゃべりたいことがあるのではないのでしょうか。

○委 員：風致地区の指定状況の調査が資料 2-2 に出てくるのですが、例えば銀閣寺では、緩衝地帯の問題で風致地区が指定されているが、実際に今残っている緑の割合が全く違うのです。つまり、風致地区の建ぺい率の指定が緩くて、建ぺい率いっぱいまで使われてしまうと現状と大きく異なるということが問題でした。風致地区の規制では不十分だということはどうみるかです。

一応風致地区は掛かっている、歴史的風土保全区域の網も掛かっているのだけど、その指定状況と現在の緑の残り方、現在の町の残り方は違うのです。今回のことで一番関心があるのは、そのずれです。景観政策の中に潜んでいる危機、潜んでいる欠陥を探し出す。現況と指定のずれということはどうみるかということがあります。

もう 1 点、住民への周知が大きな課題だと思います。自分の家が世界遺産のバッファゾーンに入っているということを、知らない方が結構多いのです。もっと一般的にいうと、景観政策でいろいろな規制が掛かったが、家を建て替えるときになって初めて知る、その時になると怒りだすという方もいる。バッファゾーンの問題も含めて、どうやって住民との問題を考えるかということが大きな課題として残っていると思います。

○座 長：いろいろ制限が指定されるということは、ある意味では開発ポテンシャルがあるわけで、今見えている景観の背後に潜む開発ポテンシャルまでみていく必要があるということですね。周辺住民への周知でいえば、周辺の住民がどういうふうに動いてくれるかも景観の大事な要素になるので、単なる周知にとどまらず、いろいろと意見を出してもらう機会を作っていただいて、景観形成の協働者として育てていっていただきたい。

京都市眺望景観創生条例を作ったときに私は委員を務めていましたが、委員会の中では597箇所をリストアップしたのです。そのうちの38箇所だけ指定したのですが、そのときに作ったリストのような資料を掘り起こして見ていただくということもあと思います。先ほど清水委員が指定されていたエリア指定についても、その前にいろいろ調査が行われるわけなので、過去に行われた調査も十分に参照してやっていただければと思います。また時間が残りましたら全体の議論をしたいと思います。

(3) 調査方法について

ア 配布資料「4. 調査方法」について説明（京都市）

イ 案件について下記のとおり質疑応答

○委員：説明はよく分かったのですが、今ひとつ実感がつかめないの、一回ぐらい実際に現地で調査しているのを私たちが見るといいと思います。

○委員：桂離宮の調査について意見を申し上げたい。桂離宮の中からほかの何物も見えてはいけない、つまり中と外は全く関係ないほうがよいのだということを目指しておられるような調査に見えました。

実際は、この桂川に面して、桂垣という有名な垣があり、外に対して表情を確実につくっている。外からどう見えるか、外に見える部分と山陰街道の関係も大事だと思います。どのような関係を外と中で持てるかという観点の調査が必要だと思いました。

○座 長：先ほどの松山委員のご指摘に戻りますが、確かに一度現地を見る方が良いのではないのでしょうか。皆さんがいろいろな関心をお持ちなので、現地に行くといろんなことがピックアップされるので、全員とまでいかななくても、行ける人が行くという形で歩いてみたほうが良いのではないかと思います。視点の取り方は重要で、人工衛星で上から見た景観は安定していますが、地面に下りてくると、視点の位置によって見え方が変わってくるので、都市計画の領域ではかつては主観的な部分が含まれる景観研究はやめたほうが良いといわれたぐらいですが、それが景観の面白さです。

桂離宮の問題についても、視点の取り方によって大きく違ってきます。外から見え

るこんもりとした緑の眺めも、それはそれでなかなかの景観だと思います。その意味で、サンプリングの方法について、事務局の方から説明をお願いします。

○京都市：桂離宮を外から見るという視点が今回の報告資料では確かにあまりなかったです。おっしゃるとおり、桂川を渡ったところからどう見えているかも本来必要です。

また、お寺の中からどうしても外の物が見える場合があるが、それが見えてはいけないのかどうか、見えるとすれば、それがどういう形であれば景観をあまり阻害しないような形で見えるのか、そういった視点の検討も今後必要になると考えております。

○委員：何を目的で調査しているのかが今ひとつわからないです。ご指摘があったように、資産の周りがどういうふうにあるかというのが問題なのか、それとも資産があるエリアがどんな場所であってほしいのかというのと、そのスタンスによって調べなくてはならないことは全然違うと思います。

何を今回の調査の目的として、何を守ろうとするのか、あるいは何を変化させながらもいい関係をつくっていかうとするのかなど、京都市の考え方を少し共有しておいたほうが良いと感じました。資産ごとに違うのかもしれないですが、基本方針的なところを一回議論したほうが、個別にいく前に安全だと思いました。

○座長：私も資料を最初に見せていただいたときから、何の目的でやるかという点が気になっていました。先ほどのリアリティが持てないというのも、目的がはっきりしていないということとも関連していると思います。逆に最初に目的が一意に定まっていたとしても、現地で新たな目的を発見することもあるはずです。マクロな目的を明確に意識しつつ、現地調査を行いながら目的を見定めていくということを同時進行的に考えていきたいと思います。

マクロに考えると、基本的には自然の共存、他者との共生を大切にしていくなかで、生命的秩序を持った伝統的な景観が形成されてきたのだと思います。そして、近代化の過程で、機械論的秩序を持った人工物がその中にたくさん入り込んでおり、それらをどういう形で調停していくのが問題になっているわけです。生命と技術、自然と人工、経済と文化といった対立が、いろんな現れ方をしていると思うんです。

その中で京都は、どういう道を取っていくのかということが問われているので、それが写真の中に断片的に、いろんな形で出ているはずですが、それを読み込むときに、現地の経験が役に立つわけです。サンプル調査を担当された方は現地に行かれてリアリティを持っておられるけど、そうでないとなかなかリアリティが持てない。見えている景観の背後に潜む人間にとっての意味や価値を把握することが大切です。

先ほどの小浦委員の質問にもありましたが、京都市として調査を始められた初発の意志についてはお伺いしたほうが良いと思います。いかがでしょうか。

○京都市：この調査を始めるきっかけは、これまで当たり前のように存在すると思っていた寺社であっても変容するという事象が、この間起こってきたことです。そのため、そういう可能性をもう一度見直すというのが、本事業の始まりです。

調査すべき場所も、守るべき歴史的資産と、その周辺との関係性を意識する必要があるとして、歴史的資産とその周辺を対象としました。

次に、各場所で何を視点として捉まえるのかは場所によって異なるので、各場所で視点を決めてないといけない。

例えば、桂離宮では、周辺には既存集落があり、それ以外の田んぼが基盤整備とともに新たに開発されていきました。宅地開発、基盤整備で変わっていることを桂離宮との関係性でどう考えたらいいのか。守るべき景観には桂離宮、旧集落、街道筋などがあるかもしれないが、そこと直接関係しないような住宅地開発もある。それをどう考えるのかというのは、まだ十分に答えを持ち切れていない。そこは1つ示唆いただきたいと思っています。その際、新景観政策の前後で建物がどのように建っているかもお示しし、新景観政策を検証しながら、規制の在り方ももう一度見直していきたい。

問題設定としては非常に盛りだくさんに欲深く設定してしまっているのは確かです。しかし、少し欲深く、課題抽出する中で論点を絞っていききたいと考えています。

○座 長：例えば桂離宮では、庭園の中の見え隠れの状態とか、視点の相互参照関係などが景観の魅力と繋がっているのだと思うのですが、今回の調査の主たる目的は、コアにある桂離宮という文化財と周辺のエリアとの関係にあるということが、お話を伺って分かってきました。景観法、文化的景観を規定する文化財保護法の改正、京都市の新景観政策などが出てきて、景観という視点から文化財の意味や価値、あるいはそれらを阻害する問題点をあぶり出そうということですね。

今までエリアを指定してきたわけですね、山並み型とか、岸辺型のように。だけどそれでは不十分で、それぞれの文化財の景観的な価値を、特に周辺との関係においてピンポイントで明確にしていくというのが目的と考えていいですか。

○京都市：大きな目的はそうです。その場合、行政だけが考えるというよりも、むしろ地域の景観づくりとの中でどう考えていくのかという問題もあります。そのポイントの絞り方のプロセス論も含めてご検討いただきたいと考えています。

○座 長：そうすると、小浦委員が指摘されていたように、場所によって全然タイプの違うものがありそうなので、3箇所ぐらいピックアップしてツアーのように巡ってみたいという感じもしてきました。

○委員：今議論している対象は、世界遺産、景観法、京都市の景観政策、文化財保護法など
いろいろな基準が適用されている。その中で世界遺産は恐らく一番厳しいです。

世界遺産には、OUV（顕著な普遍的価値）があり、どう守るかは決めています。
当然そのOUVに従ってその景観がどう守られているか、あるいはその周辺の環境を
含めてどう守られているかということを議論します。しかし、一般の文化財や景観計
画に書いてある価値の規定は、少し緩いです。

世界遺産は、ガイドライン、基準、個別審査の3段階で保存管理をする仕組みにな
っています。そして、京都市の景観政策は、全国の世界遺産の本体とバッファゾーン
含む手法としては一番進んでいます。ただ、京都の場合は、市街地の中にあって開発
圧力も高いため、基準とガイドラインだけではOUVが守れない可能性をどう探して
くるかです。また、世界遺産以外のものに関しては、もう一度価値観からきっちり議
論しないと、どう基準をつくっていいかが分かりにくい。さらに、調査結果にOUV
を書けるものとこれから書くべきものが出てくると思われます。そうすると、今の基
準がどうで、どこで不適合があるかということも見えてくると思います。

○委員：今回の調査にぜひ取り入れていただきたいことは、ガイドラインなどで「良好な緑」、
「優れた自然」、「調和した」という言葉が出てきますが、それが具体的にはどうい
うことなのかを、各場所でしっかり見ていくことがとても大事です。

例えば、桂離宮の桂垣は、桂川が氾濫したときに被害を抑える1つの工夫でもあつ
たと思います。単にどんな緑でもあればいいわけではなく、その場所の意味がある
と思います。そういうことをとらえておくと、何らかの開発や工事の際に、単に数字的
なものだけではない大事さを考えながら対応ができると思います。特に境界部の扱い
方は点検していただきたいです。

○委員：基準でうまくいかない場合は、個別審査での対応になるかもしれません。

○座長：恐らく今回全体の見取図のような調査結果が出てきて、個別のエリアについては周
辺住民、行政、事業者などの関係者まで含めて落とし込みをしていかないと、具体
的なレベルに下りていかない。そのためのベースマップをつくるのが、今回の調査か
なと思います。もう少し時間がありますが、他にご意見はございませんか。

○委員：先ほどの「意味」について、資産を構成している要素と場所という意味と、周辺の
町の成り立ちを捉えるという意味の2つあるが、市としてはどちらを対象としている
のですか。

○京都市：私たちが、許認可における指導を行う際にも、資産の構成要素の部分と資産の周辺

の部分の両方が出てきますので両方です。例えば資産に当たる樹木については、直接この緑をまねてくださいというわけではなく、周辺の樹木の例とその意味を示して、それを計画に反映していただくということはあると思います。

- 座 長：恐らく、サンプル調査の結果を見ても、資産の構成要素である境内の中にもマンションや福祉会館などいろいろなものが建っていますし、別の都市の神社の例ですが、参道の途中に踏み切りが設けられた神社もありました。そういう意味では寺社が現代社会の中で持続可能性をどのように担保するかという問題とも非常に深く関わっていると思います。その意味では、どちらかに絞るといよりは、コンテキストを具体的に解説していくことが重要なのではないかと思います。その状況に応じてどういう対策を考えかが決まってくるのではないのでしょうか。

残りの時間で板谷委員、大庭委員にご発言ください。

- 委 員：もともと京都は景観に対する見識の高いところですから、ここの場所ではこんなことをすべきではないとか、こういうふうにするべきであるとか、そういうコンセンサスがもともとあったはずだと思います。

京都は、景観について多様な規制があって、その中で書かれている方針は非常に詳しいものです。このエリアはこうあるべきであるという景観の保全や形成の方針を文書で示されていると思いますが、これらの文書はそういうコンセンサスをベースにして書かれていますから、他所から来た方々がこれらの文書を読んで、それが景観とパッと結び付かないという問題があるのだと思います。今言われたような「意味」の部分もきちんととらえて分かりやすく示すことが必要であろうと思います。

それからコンセンサスが生かされているエリアのひとつが、先ほど指摘した古地図にみられるような既存集落です。既存集落がつくられていた時代には、やはりコンセンサスが生きていたであろうと想像されます。そういう面からいきますと、例えば現地調査のポイント（参考資料12ページ）では、既存の集落の広がりとは違うくり方がしてある部分もあると思います。例えば、「周辺の町並み」と囲まれている部分では、新しく開発された部分と、道路によって分断された既存集落の部分が一緒にくくられています。これはちょっと違うのではないかなと思います。

それから、境内から見える、見えないという議論が写真で示されているのですが、どこが見えているのか、何が見えているのか、それについても示すべきではないかと思っています。

また、将来敷地内に大規模な建物が建つ可能性がある敷地を茶色でくくっていただいていますけれども、これが建ったときに境内から見える可能性があるのか、ないのかということも合わせて検討したほうがいいのではないかと思います。

○委員：私は、この調査を具体的にどのように進めたらいいのかという点に関心を持ちました。そこで、調査の目的とも関係しますが、どういう目的の場合にどれぐらいのエリアを見ていく必要があるかということ事前に定めておかないと、いろいろな問題点が出てきたときに確認できないところがあると思いました。また、エリアで見ると建物、資産で見ると、当然エリアの取り方は違うと思いますので、そのあたりもしっかり考えていく必要があると思います。

○座長：今大庭委員がご指摘いただいたことに関連して、ケヴィン・リンチが書いた『知覚環境の計画』（Managing the Sense of a Region）に興味深い事例が紹介されています。それはエルサレムの門から見える可視領域図ですが、それを見ると可視領域はきれいな円になるわけではなく、いろんな場所に離散的に分布する領域が見えていることが分かります。そういう意味ではエリアの設定の仕方自身も、地域のコンテキストに即して決めていく必要があると思います。

一連の議論を聞いていて気になったのは、伝統的な町並みなどで、ちょっとホッとしたり、ヒヤッとした感じがしたりという、たたずまいとか、雰囲気とか、まとまりといった全体的な意味とか様相のようなものが景観の本質としては大事なのに、物的な要素に比べるとあまり取り上げられていないことです。

○委員：先ほどの境内の中に施設が建つ話も非常に重要な点です。例えば、神社の中に結婚式場を建てることをどの程度まで許すのか。それから、福祉施設ではどうか。当然、宗教法人、宗教団体としては、結婚式や福祉、医療、教育などには真剣に取り組まれる。これは、明治の最初の上知令、廃仏棄釈、あるいは戦後の財産税の際に、社寺がどうなり、社寺が宗教法人になる過程の中で、社寺の権利と宗教法人としての法的な権利と義務に関してどう考えるかという課題です。それを研究されている方の本を読みましたが、遺産本体にも、景観問題にも関わってくることで、コモンセンスというような簡単なものではなく、場合によってはお寺さんと論争しなければいけないことがあるかもしれません。

○座長：ご指摘のとおりで、私も資料を見て、むしろ深く研究したいと思うような気持ちでとらえました。それも含めて松山委員から何かありますか。

○委員：今、お話を聞いていて、ストーリーが大事だと思いました。景観は、ただ単にお寺だけで守れるものではなく、周りの方のいろいろな協力があって初めて成り立つものです。景観の基準における数字で納得して、「まあ、それはしないとけいけないな。」と思う方もいると思いますが、「どこにこの基準があるのか。」「なぜ30%なのか。」と思う方がほとんどだと思います。

そうした数値ではなく、例えば、私のお寺でも、とても大きいシイの木があります。お寺をつくった和尚さんの時代は戦国時代で、墓を作ることで争いに巻き込まれてお寺が焼かれる恐れがあります。そこで和尚さんが、「墓はいらないから、自分の好きなシイの木を植えてくれ。」と言ったので、今もシイの大木が5本あるのです。そういう話を聞けば、その木がとても大事な木だから切ってはいけないことが、後々の人まで分かるし、そういう認識がみんなに広がると思います。

やはり、基準で表すのも大事ですけども、その地域に長いこといらっしゃるおじいさんやおばあさんの話をお聞きして、「なぜあの木はあそこにあるのか。」「なぜあの森は守られているのか。」など、そういうものを掘り出して皆さんに周知していく形も、地域の皆さんにご協力していただく際には非常に大事だと思います。

○座 長：最後に、本当に有り難いお話しを聞かせていただきました。時間も尽きてきましたので、本日の議題はこれくらいで終えたいと思います。いろいろなご意見が出てまいりましたので、事務局におかれましては、これを参考にして事業を進めていただければと思います。

○京都市：ありがとうございました。今後この検討会は、1ヶ月に1回程度開催します。現地調査については、是非とも検討して行いたいと考えております。本日いただいたご意見をもとに、調査の方法を少し磨いていきます。また、調査の体制を見直して、まずは世界遺産から調査へ入っていきたいと思います。

(4) 閉会

ア あいさつ 松田都市景観部長

— 了 —